



国宝・飛雲閣 ひうんかく
金閣、銀閣とともに京都三名閣の一つ。
秀吉が建てた聚楽第の一部とも言われる。
じゆらくだい



常例十六日講
毎月十六日午後一時より
お経練習・法話会
写経会
毎月第二・四金曜日
午後一時より

↑ 滄浪池の水を抜き通路を作る。
→ こけら葺きの屋根の葺き替え
に向け、素屋根という足場を建
設する。文化財修復の際、技術
伝承の為にあえて丸太を使う。

阿弥陀堂・飛雲閣修復始まる

2023年の親鸞聖人御誕生850年、立教開宗800年の慶讃法要に向けて、本願寺の国宝指定建物である阿弥陀堂、飛雲閣、唐門の修復が始まっている。

阿弥陀堂内の本格修理は33年ぶり。内陣・余間・三之間の漆塗、金箔の貼り直しと彩色を行い、金具や巻障子、天井画、襖、宮殿を修理していく。調査後、亀裂や剥落が確認された天井画が取り外され、修復が進められている。厚さ0.1ミリの本紙を、90度の角の木枠から取り外し、剥落した部分の補彩を行っていく。本紙を補強するための下張り（和紙）が何層にも重ねられていることから、繊細な作業が続く。

飛雲閣の修復は、屋根の葺き替え、木部や表具の修理、壁の補修、畳の表替に加えて、隣接する黄鶴台附廻廊の修復も行う。屋根の修復は21年ぶりとなる。飛雲閣の屋根は現在、傷みの激しい部分を鉄屋根でしのいでいる状況。葺き替えは「こけら葺き」の手法で行われ、長さ30センチほどの樫の薄板を少しずつずらしながら重ね、竹釘で固定していく。

屋根修復のために、滄浪池の水がすべて抜かれ、高さ15メートルの素屋根が建設された。

唐門の修復工事は6月から。檜皮葺きの屋根の葺き替えと、漆塗、金箔、彩色、鋳金具、石敷の修理を始める。

今回の修復は、宗門総合振興計画及び本山振興計画の一環。工期は2022年3月まで。総工費12億円。



修復後の天井画（波のデザイン）と下地（木枠）

伝灯奉告法要御満座消息

門主 大谷 光淳

十期八十日間にわたるご法要を厳肅盛大にお勤めすることができましたことは、仏祖の指導きと親鸞聖人のご遺徳、また代々法灯を伝えてこられた歴代宗主のご教化によることは申すまでもなく、日本全国のみならず、全世界に広がる有縁の方々の報恩謝徳のご懇念のたまものと、まことに有り難く思います。

自分さえ良ければ他はどうなってもよいという私たちの心にひそむ自己中心性は、時として表に現れてきます。このような凡愚の身の私たちではありませんが、ご本願に出遇い、阿弥陀如来のお慈悲に摂め取られて決して捨てられないことのない身ともなっています。そして、その大きな力に包まれているという安心感、日々の生活を支え、社会のための活動を可能にする原動力となるでしょう。凡夫の身であることを忘れた傲慢な思いが誤っているのは当然ですが、凡夫だから何もできないという無気力な姿勢も、親鸞聖人のみ教えとは異なるものです。「凡夫の身でなすことは不十分不完全であると自覚しつつ、それでも『世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ』と、精一杯努力させていたたく」と、即如前門主が教示された生き方が念仏者にふさわしい歩みであり、親鸞聖人のお心になつたものであるといただきます。

今、宗門が十年間にわたる「宗門総合振興計画」の取り組みを進めております中、来る二〇二三年には宗祖ご誕生八五〇年、そして、その翌年には立教開宗八〇〇年という記念すべき年をお迎えたいたします。改めて申すまでもなく、その慶讃のご法要に向けてこれからの生活においても、私たち一人ひとりが真実信心をいただき、お慈悲の有り難き尊さを人々に正しくわかりやすくお伝えすることが基本です。そして同時に、仏さまのような執われのない完全に清らかな行いではできなくても、それぞれの場で念仏者の生き方を目指し、精一杯努めさせていただくことが大切です。み教えに生かされ、み教えをひろめ、さらに自他ともに心安らぐ社会を実現するため、これからも共に精進させていただきます。

（紙面上一部抜粋）

初鏡

住職 蒲原 霊英

あけましておめでとうございます。昔であれば、お正月を迎えてまた一つ年齢を取るところです。最近、私も鏡を見る度に白髪やシワが増えている、確実に年齢を取っていることに気付かされます。

さて、中国の唐の時代、今から約千四百年ほど前の僧侶である善導大師（七高僧の一人）が、「経教はこれを諭うるに鏡のごとし」という言葉を残されています。お経に説かれている仏様の教えは、鏡のようなものなのです。鏡が鏡の前に立つ者を偽りなく映し出すように、仏法に遇わせていただくと、私の偽りない姿が映し出されるという意味です。

確かに鏡の前に立つと、物理的には私の偽りない姿が映し出されますが、心の奥底までは映し出されません。たとえ映し出されるとしても、きつと私達は見えないようにするでしょう。何故か。それは、私達は他の誰よりもわが身が可愛いからです。だから、「他人に負けたくない、損したくない、自分分は間違っていない」と自分を正当化し、「老いたくない、病気になるたくない、死にたくない」と自分にしがみつきます。でも、それが自分の思い通りにならなくて悩み苦しむ。そして、悩み苦しみの原因が自分の外にあるのではなく、内にあることに気付かない。それが私の偽りない姿です。この私の真の姿を「ちゃんと言えないよ」と仏様は鏡を差し出して下さっているのです。そして、「このまま果てしなく実体のないものを追い続け、しがみつきの、迷いながら一生を終えて良いのですか」と私に問うて下さっているのです。これで良いわけはありません。私の真の姿を見させていただきます。すると、こんな私でもこうして生かさせていただいていることに、自然と感謝の言葉が出てくることでしょう。頭が下がることでしょう。それが、南無阿弥陀仏のお念仏なのです。「念仏申さるべし」。これは、八代門主の蓮如上人が、弟子の道徳に亡くなられる年の元日に言われた言葉です。年頭にあたり、改めて身を正してお念仏申しませう。合掌 愚かなる己の姿 初鏡